

1.1. 地域の活性化によるコミュニティと街並みの再生

津屋崎町街並み保存協議会
(福岡県宗像郡津屋崎町)

1. 活動の背景と目的

1. 活動の背景

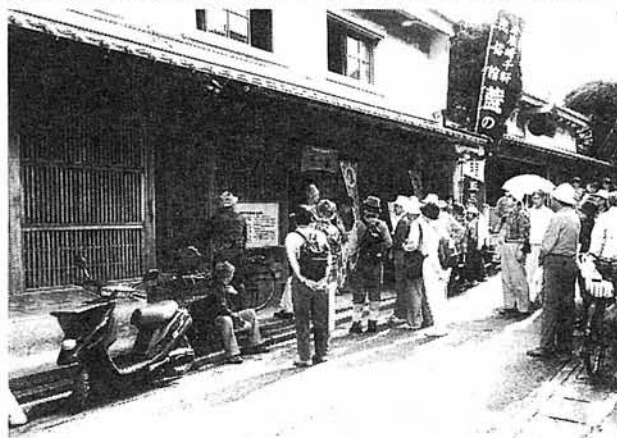
津屋崎は江戸中期から明治にかけて、製塩と塩の海上輸送から発展した海上交易により、「津屋崎千軒」と言われるまでに繁栄した町だった。

しかし、明治になって国鉄が町を通ることを拒否したことと、専売制度による塩田の廃止、陸上交通の発達による海上交易の衰退とにより急速に町がさびれ、かつて繁栄した時代の大きな家が次々に解体され、「津屋崎千軒」の面影を残す街並みも影が薄れている。

その上に、近隣にスーパーマーケットなどの大型店舗が進出し、何百店もあった商店や職人の作業場が60店を割り、通りに人影もなく、お年寄りが豆腐1丁を買いに行ける店が近くにない有様になっている。しかも、商店のほとんどに後継者がなく、閉店は時間の問題だと言われている。

明治34年(1901年)に建てられた「藍の家」は、60余年前に廃業した藍染店の住居だった家で、現代生活には不適だと新築の住居に移られ、6年前に空き家になった。個人で補修して維持するには負担が大きくてできない、解体して駐車場にするという話を聞き、「津屋崎の自然と開発を考える住民の会」「郷土史研究会」「文化協会」「商工会」「観光協会」「区長会」の6団体で「街並み保存協議会」を結成し、「津屋崎千軒の面影を残す貴重な建て物で、町の文化財でもあり、歴史の証人として是非保存を」と町と町議会に働きかけ、1年後にやっと「町が管理し街並み保存協議会が運営する」ことで保存が決まった。

当初、町は集会所か公民館にとの意向だったが、町家の民俗資料館の方が、より有効な使い方だと考え「津屋崎千軒民俗館『藍の家』』という名称を付けた。さらに活用方法や町の活性化を学習・討議して、この家を公開すると共にもっと活用して町の活性化に役立ててこそ保存の意義があると、平成6年3月に「津屋崎現代美術展」を開催し、以後3年間、津屋崎の地域性を発揮しながら集客力のある催しを工夫しつつ歩んできた。



築後100年近い「藍の家」

2. 活動の目的

文化財であり歴史の証人である「藍の家」や津屋崎千軒の街並みを保存・再生することにより、衰退している津屋崎町の活性化をはかり、活性化により街並みの再生が可能となる二つの目的をもっている。そして、若者たちが後継者となって、さらに豊かな住みよい町になるようにしたいと考えている。

II. 活動の内容

「津屋崎千軒回遊路」の設定

「藍の家」の催しにより、来町者の増加はあったが、ある程度以上の増加は見られず、一度来た人が何回も訪れることが少ない。町にリピート性が乏しいこと、リピート性を高めるには、「見る・遊ぶ・食べる」場を増やす必要があることが明らかになった。そこで、取りあえず現在の街並みをゆっくり歩いて楽しんでもらうようにしようと、回遊路づくりに取り組むことにした。

・道標設置

津屋崎に親しみと関心をより高くもってもらうには、町を知ってもらうことが第一である。その一つとして、行政区に旧町名（小字名）を併記した道標を設置する。回遊路と周辺にある史跡や社寺への道標も合わせて50枚を設置した。

・表示と説明板

道標に合わせて史跡や社寺の表示をし、説明板も作り設置した。20枚。

・小区域ごとの案内板

道標だけでは分かりにくいところもあるので、区域ごとに案内板を作り、3月いっぱいでは、他の仕事に押されて、一枚だけ立てた（5枚製作）。

・休憩所の開設

かねてから、町の中心にゆっくり腰を下ろして休める所、お茶を飲める場所が欲しいと、町の内外の人達から要望があったので、回遊路のほぼ中心にある街角の空家を借りることができ、「津屋崎千軒回遊茶屋」と名付けて茶店とした。

第2回節句人形展に合わせてこの茶店を開き、農家のおばあさんに手作りの饅頭や餅などを目の前で作って売って頂く

ことにした。ところが、大変好評のあまり3日で忙しさに倒れられ、茶道同好会の方たちが後を引継いでお茶をたてて下さったが、毎日店を開けることができず、催のある時だけ、自由にお茶が飲める休憩所として使うだけになった。

・物産販売所の開店

上記茶店を何とか再開しようと試みたが、「O-157」事件の発生で、手作りの食物を作っていた人たちが皆自粛され、頓挫してしまった。そこで「生物」を扱わねばよいだろう。休憩所の次に物産販売所が望まれていたので、3月29日から、筑前琵琶の演奏会に合わせて、「津屋崎の物産販売所」を開店した。

物産といっても、ほとんどが農・漁家の主婦や一般家庭の主婦、あるいはお年寄りの方たちの片手間に作られたものや、趣味で作られたものである。



道標製作の様子



休憩所の「あけぼの」

・「藍の家」の年間事業計画

「津屋崎千軒回遊路」の設置と充実を図り、町への入り込み客の定着・増加を試みつつ、「藍の家」を活用した事業として、4月に第2回節句人形展を5日から15日まで開催。21日尺八と琴の演奏会、5月12日街並みスケッチ大会、6月1日から10日までスケッチ会作品展と併せて陶芸同好会展、その中で8日に陶芸体験教室をする。9月8日講演会「町史編纂余話」、9月18・19日ギャラリーキャラバン作品展、10月10日から20日まで第2回染織展、11月16・17日一人芝居「ザ・RASHOMON」を上演、11月20日から平成9年1月19日まで水墨画同好会と書道同好会の合同作品展、2月14日から24日まで洋画同好会作品展、3月29・30日筑前琵琶演奏会を行った。

・先進地視察

一般会員の視察会は、日程の都合で本年度はできなかったが、運営委員のみの視察旅行を3月5・6日に大分県の竹田市と臼杵市に行き、多くの事を学ぶことができた。

III. 活動の効果及び今後の課題

1. 活動の効果

- ・町おこしに対する町民の関心が徐々に高まり、「藍の家」への町民の入場者が増加している。
- ・街並み協議会への入会も少しずつだが増え、一般会員の協力度も増えてきた。
- ・町職員の姿勢が協力的になり、町外視察に同行したり、学習会に参加するようになって来た。
- ・催しをしていない平日に地図を片手に歩く町外からの来訪者が目につくようになって来た。
- ・「物産販売所」の開店に多くの方が協力して下さり、品物の提供も多く、周辺の方たちが買い物によく訪れて下さる。
- ・閉店が続いていた中で、新たに開店をしようという気運が見られ、期待している。

2. 今後の課題

- ・町おこし・町づくりに対する行政と町民とが一体となった取り組みが早急にできること。
- ・史跡、寺社などの案内と説明板を増やし、トイレの整備と増設、新たな商店などの開設、商品や商店、販売方法などの改善をはかり、「回遊路」を充実させること。
- ・広報宣伝の方法を工夫・改良し、効率を上げること。
- ・「あけぼの」の売り上げを伸ばし、毎日開店できるようにすること。(現状では土曜・日曜・祝日及び「藍の家」で催しがある時以外は閉店せざるを得なくなる。)
- ・街並み協議会だけでなく、町の行事やサークル活動などへの若い人たちの参加が皆無に等しい状況である。「藍の家」での催しや街並み協議会への若い人たちの来館・参加をどうしたら実現できるか。これが現在の最大の課題であり、この一年間でせめてその糸口だけでもつかみたい。